

丹羽文雄集

日本文学全集 46



筑摩書房

日本文学全集 46 丹羽文雄集

昭和四十五年十一月一日発行

著 者 丹羽文雄

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社

本文印刷 多田印刷株式会社

製本 株式会社鈴木製本所

丹羽文雄集 目次

菩提樹

五

厭がらせの年齢

三六

こおろぎ

三八

柔媚の人

三九

小説作法(抄)

四三

小説覚書

四三

文章に就いて

四六

初心者の心得

四六

年譜

四七

人と文学

亀井勝一郎
四八

口絵写真撮影
田沼武能

丹羽文雄集

菩提樹

葉の花の道

小学校の校門を出ると、友達は左右に分れていくのだが、月堂良薫だけがまっすぐに歩きつづける。ランドセルを背負った彼は、まるで学校のかえりみち、あそびに迷いこんだようにして仏応寺の山門をくぐる。

彼の家は、小学校と向い合っていた。山門が、校門と向き合っている。山門のうしろに、本堂がどっしりと聳（も）えていた。山門をくぐると、良薫の足が俄かにのろのろと歩き方を交えてしまうのである。いつからこの癖がついてしまったのか。仏応寺の境内は広々として、静まりかえっていた。良薫は、庫裡の中にはいつていくことをためらっているように見えた。

ふかい悲しみが良薫の心を捉えた。歩みを忘れさせるほどの悲しみであった。毎日学校からかえって来て、わが家の山門をくぐると、忘れていた大切なことを思い出したように、悲しさがどっと胸にうちよせてきた。山門のところ

には、毎日淋しさと悲しさが、彼を待ちかまえているようであった。が、彼にはこの悲しさをどう解釈してよいかわからなかった。この悲しさがどういうことから生まれたのか、よく知らなかった。

仏応寺全体が、彼には大きな空洞のように思われる。悲しさの性質が判らなくとも、悲しさの重量感が、良薫を粉粉にひしいでしまう。

——お母さんがいない！

それがすでに、一カ月に及んでいた。どこへ行ったとも家族は説明をしなかった。父の宗珠にたずねると、

「いまにわかる」

というだけであった。良薫からそんな質問をうけることが、父親には痛いようであった。良薫ほどに母の蓮子のいなくなったことにうろたえていないところを見ると、父には母のいどころが判っている風であった。祖母のみね代にたずねると、

「悪いお母さんですよ。良薫をすてていくようなお母さんは……」

そうはいうものの、祖母は良薫をすてて行った蓮子を、それほど憎んでもいないようである。年をとった女中のお杉にきいてみても、

「わたしには、わかりません」

と、良薫と目を合わすことを何故か避けている。

「松寿さん、お母さんがどこへ行ったか、知らない？」

松寿は、仏応寺の先代の弟であった。一生独身をとおして、六十六歳になつてゐる。丘の墓地の家に住まつていて毎日仏応寺まで通つてゐる。頭が足りないといふとされてゐた。僧侶の位はとつてゐるのだが、住職となつた経験もなく、仏応寺の役僧をつとめ、下男をつとめ、たれからも侮り見られてゐた。良薫は、松寿が好きであつた。松寿は境内をとりまいてゐる生垣の刈込みを本職のように上手にやる。夏のさかりに刈込みをやつてゐると、四、五尺の蛇が枝のように生垣の中にかくれてゐる。

「しッ、しッ、早くいけ、早くいくのだよ。早くのかないと、鋏で切られてしまふよ」と松寿は人間にものをいうようにいう。「すんでのところで、おまえの胸へ木鋏をいれるところだつたよ」

長い木鋏の先で生垣を叩いて蛇を追ひやるのである。蛇は面倒くさそうに位置を変える。気のきかない蛇の場合は松寿は首のところを器用につまみあげて刈込みの済んだ生垣の方へ移してやるのだつた。松寿は、蛇をすこしもおそれなかつた。首のところをつまんだ蛇を、良薫に示して、「可愛いもんですよ、良薫さん」

松寿は強いと、良薫は思つた。松寿は、ひとの出来ないことをやつてのける。しかし、良薫は松寿の弱点を知つてゐる。蛇に対して大胆不敵な松寿も、蛙をみせると、悲鳴をあげて逃げ出すのである。小さい雨蛙にも、敵わなかつた。蛇を首にまきつけたら、ふところに藏つたりして平気

な松寿が、どうして小さい雨蛙すらおそれるのか、良薫には謎であつた。それだけに彼は松寿が好きであつた。

「さあ、お母さんがどこへいかれたのか、わしにはわかりません」

松寿だけは本当のことを言つてくれると良薫は思つてゐる。

母の蓮子がどこへ行つたのか、誰も教えてくれなかつた。出入する檀徒の世話方も、女人講の連中も、それにふれられることを細心に注意してゐるようであつた。八歳の良薫に、どうして母の行方がさぐり出せるだろうか。彼は学童帽を、すこしあみだにかぶつてゐた。境内のまん中に佇んだ。庫裡からは、人声も何の物音も聞こえなかつた。本堂の背の高い、重い障子戸には、裾半分に陽があたつてゐる。染まるように白かつた。目に痛い。彼は、鐘樓をながめやる。閤伽桶を棚にならべた閤伽井戸のあたりに目を投げる。本堂と鐘樓のあいだに、墓地が見える。新しい墓は、まっ白だ。深夜になると、亡者たちが墓の下からあらわれて、がやがやと話を交わしてゐるようである。神社の境内の深夜は、底知れないほどの静寂な世界だ。寺の墓地の深夜は何となくにぎやかであると良薫は聞かされてゐる。現実的には目に見えないのだが、ひとの気配が感じられるからだといふのである。良薫は、墓地が恐かつた。

庫裡の重い障子にからだをもたせかけるようにして、開ける。庫裡の冷たい空気が、彼の頬をかすめて流れ出した。

「ただいま」

高い天井に、声は吸いとられてしまう。その声に応じて畳をするようにして急いでこちらに向う足音が聞こえる。

「おかえりなさい」

祖母のみな代がにこにこして、良薫の背からランドセルを外しかかる。良薫はされるままになっている。自分の胸の悲しみと空虚にすこしも気のついていない祖母の態度が、うらめしかった。祖母も父も女中も松寿も、蓮子の家出事件を早く忘れようと努めているらしいのだが、良薫だけが逆に、忘れまいとしがみついているようだ。

「今日は学校で何をしたのですか。おべんとうは、きれいに食べて来ましたか」

良薫の肩を抱くようにして、勉強室につれていく。ランドセルから、祖母は弁当箱や教科書を取り出し、きちんと机の上に整頓をする。祖母のからだから、いい匂いが流れている。祖母は、うす化粧をしている。ひどい撫肩であり、背が高かった。昔流に前髪をふくらませた束髪に結っているのだが額がひろい。男のような恐い感じが、そこにあった。良薫は、祖母が鏡に向ったあとと、寝起きとの相違を知っている。別人のようであった。五十三歳の祖母の寝起きの顔には、しみがあらわれていて血色が悪く、皺が多かった。祖母は、髪を染めている。ひとたび化粧をほどこすと結構四十五、六の若さに見えるとも誰かがいう。そのことを祖母は得意に思っているらしいのだ。

「おばあさんは、年甲斐もなく、赤いものをつけたがるのよ」

と、母の蓮子が良薫に愚痴ったことがある。母には、祖母の趣味が腹立たしいようであった。いまま祖母はうす桃色の肌膚を襟からのぞかせている。

「お父さんは？」

「寺役よ」

じやくというのは、父親が檀家にお経をあげにいくことだと良薫は教えられている。

「お母さんは？」

学校からもどりと、両親の所在を判を擦したように訊くことが、良薫の習慣になっていた。ただいまの後に、必ずこの質問を発した。格別両親に用があるわけではなかった。何となく父と母の所在をたしかめたいだけである。何かをしているとか、外出をしていると聞けば、彼の気持は済んだ。が、母が家を出てからは「お母さんは？」と訊かなくなった。訊いては悪いような気がする。それにふれることが、彼はおそろしいのである。おかしいことに、彼はまだ一度も、「おばあさんは？」と祖母の所在を訊いたことはなかった。祖母を除外しているつもりはないのだが、訊ねる相手が両親に限られているのは、どうした心理だろうか。祖母は、おやつを用意している。学校からかえって来る良薫を、いつも祖母は待ちかねていた。半紙に包んだおやつをポケットにねじこむと、良薫は庫裡をとび出していく。

薪を割っている音が聞こえる。南側の庭の隅の物置の前で、松寿が薪割りをやっている。松寿はいつも、白衣をきいている。が、仕事をする時には、色のさめた木綿の袴をつけている。松寿の白衣は、いつも濁っていた。洗濯も、松寿が自らやる。松寿が良薫を見あげた。ふたりは、何ということなしに微笑を交わした。松寿は何かいいかげであったが、ことばにはならなかった。あきらめたように、再び斧をふりあげた。木片が勢いよくとんだものらしく、松寿の左の脇に血の痕がついていた。

良薫は、本堂前の広場に出た。静まりかえっている。山門前の道路には、時たまトラックが走るだけであった。改正道路が仏応寺の裏手に出来てからは、バスやトラックのほとんどがそちらを走るようになり、こちらの道は置き忘れた形になっている。彼は友達があそびに来るのを待っていたが、だれも来そうにないので、再び松寿の薪割りの前にもどった。

女中のお杉が、井戸端で庖丁の音をさせている。仏応寺は、静まりかえっていた。いつものことである。

「松寿さんは、いつ丘の家へかえるの？」

「この薪が片付いたら、かえります」まるで主人に仕えるように松寿の口はいいねであった。仏応寺の月堂家の血をひいていながら、頭が悪いということのために、みずから身分を低めてふるまっている。自分を卑下してふるまうことも、頭脳の悪い証拠であろうか。「今日は、仕事も早

く片付きました。お風呂の水もくんだし、本堂を閉めるのも、ご院さんがして下さるそうですから、早目にかえります」

「ぼくも一しよに丘の家へいくよ」

「おばあさんのお許しが出ましたか」

「平気だよ」

「いけません」

「おばあさんなんか怒ったって、こわくないんだ」

一カ月も続いている胸の空虚と、悲しさを相殺するため、時には祖母に楯ついてみたい誘惑を彼は感じていた。

が、無断で良薫が丘の墓場の家へいけば、その尻拭いを松寿がしなければならなかった。無断で子供をつれ出したという風に、祖母のみね代は解釈をする。みね代は仏応寺に嫁いで以来、良人の弟の松寿を目の敵のように扱った。記憶力がすこし悪いところにつけこんで、永年かかって、松寿をまったく仏応寺の下男の地位に追いこんだ。松寿を見下すことを、みね代が率先して実行している。それをねかえすだけの気力が、松寿になかったようである。仏応寺の一隅に住まっていたのも追い出されて、淋しい墓地の家に移ってから、二十年も経っている。

みね代に小言をくらうことは判っているが、薪割りが片付いて松寿と良薫は仏応寺を出た。長身の松寿は、前かがみになって歩く。白衣の肩が木の端を入れているようにつき出していた。

仏応寺は、丹阿弥市の街外れにあった。丘の墓地までは一キロの距離があった。一キロの道は、とうに農地整理が済んでいるとはいえ、通る人もすくなく、草が生え放題である。二本の轍のあとがついているのは、お百姓の車のおったあとである。越年の草は、立ち枯れになっているが、両側の田圃は菜の花のさかりであった。黄色の毛氈を敷きつめたようである。うす甘い菜の花の匂いが、漂っている。白い蝶と黄色の蝶がとんでいる。前方に、丘が見えた。墓石が不揃に立っている。松寿の家は、墓地のまん中に比較的大きな屋根をもっていたが、むろん丘の墓地は仏応寺の所有であった。

丘の近くまで、丹阿弥市の新しい家々が迫って来ていた。丘全体が町にのまれてしまうのも五、六年の内であろう。しかし、たれも墓地の近くは嫌うらしく、もっと早く接近しそうにみえていながら、新しい木々は丘を遠巻きにしている状態であった。

二人は、黙って歩いていった。

ふりかえると仏応寺はとおくになった。家並の中から一ト際大きく本堂の屋根が聳えていた。菜の花の海の中に、仏応寺が浮んでいるようである。菜の花は、鮮明であった。胸の中にしみて来るような、強い黄色であった。良薫は、胃袋の中にも菜の花の匂いを嗅いだ。

「お母さんは、かえっておいになりませんよ」
だしぬけに、松寿がいった。良薫が、立ちどまった。良

薫は恰度糞尿の溜込みの壺をうしろにして、松寿の太い皺の多い顔を見つめた。

「どうしてお母さん、かえって来ないの？」

松寿が、首をふった。

「去年の春、お母さんが五日間、かえって来ないことがあったでしょう」

良薫は、大切なことを忘れていた。母がだまっていなかったという悲しさは、経験済みである。しかし、一カ月もつづけて母がいなくなったという経験がなかったので、現在の大きな悲しみのために、去年の淋しさを忘却していただ。良薫は、とっさに、母は二度と仏応寺にもどって来ないなと感じた。たれがそう極めつけたわけでもない。良薫自身がそう感じた。彼は溜込みのうっすらと匂う中からだをふるわせた。

父親似の良薫は目が大きかった。が、口許は母親のをうけついでいる。

「どうして判るの？」

松寿が歩き出した。

「ね、どうして判るの？」

自分には、よく判っていることだった。が、大人の世界は判らない。松寿に判っているように、彼も判りたいと焦った。

「良薫さんは、まだ八つです。大きくなったら、ひとりでに判ります」

良薫は、松寿の声の中に悲しさと絶望のふくまれているのを感じた。菜の花は続いていた。それきり、松寿はものをいわなくなった。大人が心の扉をしめてしまえば、八歳の智慧では歯がたたない。良薫は松寿の腰ぐらいの高さしかなかったが、ひとかどの分別を蔵した人のように、ポケットに手をつっこんで、うな垂れて歩いた。手の先に、おやつが握られていた。

丘を登った。松寿の家には、雨戸がなかった。四間に六間の建物は、天井板もなく、土台もろくに築かれてなかった。闕が、宙に浮いている。良薫は馬乗りになるようにして、越えた。三方面が開いている。風は丘を吹きぬく勢いのまま、家の中をとおす。柱だけ立っている控所と思えばよろしい。建具も相当に痛んでいる。その中の隅の一角所に、八畳ほどの居間がつくられていた。芝居の舞台の座敷に似ている。障子のしまる闕がついているのだが、障子がなかった。僅かに部屋らしく三方が壁でかこまれていて、壁の一つに押入があり、それに向った壁には、親鸞の画像の粗末な軸がさがっていた。その前に塗りのはげ落ちた小さい経机があり、小さい蠟燭立てと、香炉があり、瀬戸物の花瓶もそろっている。りんもあった。もう一つの壁には、墨染の法衣と輪袈裟がぶらさがっている。使い古した法衣なので、誰も盗んではいけないのだろう。良薫は、この家の中でくらししている松寿を想像すると、胸が痛くなる。あまりに仏応寺の生活とはちがっている。頭が悪いと

いうだけで甘受しなければならぬ運命とは思えないからである。

ときには、煮炊きもするのだ。七輪と鍋が二つ、一人分の茶碗と箸が、経机のそばに置いてある。

「あけっ放して寝ていて、恐くないの？」

「恐いと思うのは、奪われるものを持っている人のいうことですよ。わしには、何も無い。こんなところにはいつて来る泥棒は、よっぽど間が抜けていますよ。雨がふってる晩には、知らない内に上りこんで、わしと一しよに寝てる奴があります」

「泥棒？」

「野犬ですよ。やっぱり人間のそばがいいとみえて、断りなしに上りこんで、わしと一しよに眠ってますよ」

良薫は、ほほえんだ。

「大きい犬？」

「この闕にとび上ることの出来る犬ですから、大きくないと、とび上れません」

部屋の闕は、良薫の胸ほどの高さであった。小さい犬が迷いこんで、夜中泣いていることがあるという。

「良薫さんのお母さんが仏応寺にいなくなると、わしは栄養失調になりますよ。お母さんはおばあさんにかくれていられるものを下さいましたから」

本来ならば、叔父と姪の關係であり、粗略にはできない人であった。配給米は、仏応寺で受けていた。

「ご院さんも、ときどき氣を使つては下さるのだが……」
 「ほく、知ってるよ。おばあちゃんが意地悪くするんだろ
 う」

すると、しないとも、松寿は答えなかった。松寿は、先のすり切れた塵帚をもつと、墓地に出た。良薫は、犬のように松寿のうしろについていく。松寿は墓石と墓石のあいだを掃除しはじめた。古くなって、枯れている墓のお花はひき抜いた。掻きあつめたものは、結構薪代りとなった。丘から眺めると、菜の花の波が丘をめぐって押し寄せているようであった。仏応寺がとおくに見える。

——あの屋根の下には、お母さんがいないんだ。風までが黄色を帯びていた。良薫は、うつすらと目に涙をためた。どこかの空に、飛行機の爆音がする。

「あたたかになると、たすかりますよ」と、松寿が箒を使いながらいった。「四月六日から、十万人講の法会がはじまります」

仏応寺で法会が営まれると、自然松寿のふところにも何かがはいるからである。マッチ一個も、氣がねしてもらっているのである。

「お母さんがかえって来なくなったら、ほく、どうなるのかしら」

母を慕う感情が、良薫の喉にこみあげた。その声が聞こえないのか、松寿はせっせと箒を動かした。

丘の墓地のだらだら坂を下る時、拍子づいて、良薫は走りだした。が、走るのはいきなりやめた。菜の花の黄色の毛氈の上に、とおく仏応寺が浮んでいる。彼のかえりを待ちかまえているように見える。良薫の足がのろくなった。

ふりかえると、丘の上に松寿が立っていた。すでに二百米の距離が出来ている。丘の墓石の中に、松寿が動かないで立っている。いつも堀じみた白衣をきている松寿も、墓の中では白い姿に見えた。松寿は箒を杖のようにして、じっと良薫を眺めている。良薫は、手を挙げた。松寿は、何の動作もしめさなかった。

松寿は何を見ているのだろうか。見渡すかぎり菜の花の中を、僅かに胸から上をあらわして次第に遠去かいていく良薫の上に、何を見ているのだろうか。松寿の目は、目に見えないものを眺めているようであった。或いは、良薫のもつ運命を眺めているのかも知れなかった。生母に家出された良薫が、これから歩いていかなければならない悲しい、恐い宿命の道を、松寿は眺めているようであった。

松寿は身動きもせずに、遠ざかいていく良薫を眺めている。六十六年生きてきた松寿の智慧が、その目に賢しく輝いていた。

田圃の道は、誰も歩いていなかった。越年した道ばたの雑草は、立ち枯れているが、その下からは春の草が芽を出

している。空はさえぎるものなく、晴れ渡っていた。空がいつもより高くなったようである。西の山々は、紫がかった紺色になって、明るい空の中にくっきりと山の稜線を描いている。鳥が四羽、西に向って、けんめいにとんでいる。定刻にねぐらにかえりつくことを願っているようなとび方であった。良薫は立ちどまって、鳥を見あげた。

遠くの橋の上を、バスが走っていく。バスは胸のところに、太い、赤い線を描いている。何の音も聞こえない。良薫のまわりには、濃い菜の花の匂いがたちこめていた。手近な菜の花は、大きな茎や葉っぱの上にのっている、僅かな花々であったが、同じ高さに花々が群れているのを一望に眺めやると、茎や葉っぱは隠されて、黄色の海になった。彼は肩から上を出して、黄色の海を泳いでいるようであった。

バスにのり、電車にのりかえてから、再びバスにのって良薫は知らない街を走っていた。母の蓮子は、どこへ行くのだとも説明をしなかった。バスを下りてから、またどれだけか良薫は歩いた。次第に大きな家が両側に並んでいる一帯にはいと、新しい、大きな鳥居があらわれた。鳥居のそばに、川が流れていた。海のような川であった。母親は新しい門構えの立派な家にはいった。

案内された部屋は、小さかったが、窓の下に川が流れていた。良薫は手すりからだをのり出した。対岸までは百米余もあるだろう。波もたてずに、川は流れている。対岸

には葦が茂っていた。葦の中に、わらぶきの家が数軒ちらばっている。水位よりも低いように思われた。

母親と同じ年配の女のひとがはいって来ると、忽ち母とひそひそと話をはじめた。良薫に聞かれることをおそれているようであったが、良薫の存在にたえず注意を払っているという風でもなかった。母は何か心配ごとを、話しているようであった。聞く方でも、母の心配を身をもってうけとっているという態度である。母は思いあまっているようであった。母が思いあまって、仏応寺の中でぼんやりとしているのを、良薫はしばしば目撃している。母ひとりでは始末の出来ない、大きな問題に悩んでいるらしい様子は、幼い良薫にも理解が出来た。しかし、何を母が悩んでいるか、それは知らなかった。仏応寺の母は、声を出して笑ったことがなかった。

空が暗くなると、ひろい川の面だけが明るく残った。それも次第に、夜の色に溶けはじめたが、母はかえろうと言わなかった。家の中が漸く騒々しくなってきた。良薫はこの家にはいる時、気がつかなかったが、この家は料亭であった。母と話をしていた人がいなくなると、女中らしいのが、夕食のお膳をはこんで来た。

「すみません、お手数かけて、すみません」

卑屈なくらいに、母は女中にあやまった。母が女中の給仕をことわると、母と子の夕食をはじめた。

「いつかえるの、お母さん？」

母は、答えなかった。仏応寺にかえっていくということ
は、すでに母の心から消えているらしい。母の顔は淋しそ
うだったが、心の中には堅い覚悟をもっているようであっ
た。

きものを覚えて再び、母と話込んでいた女のひとがはい
って来た。

「四、五日、のんきにあそんでいくといいわ。あなたのよ
うにそう思いこんでいては、からだに毒よ。その内にはま
たいい考えも出るでしょう」

「ほんとうにすみません、迷惑ばかりおかけして……」

「その代り何のおかまいも出来ないわ。こんなせまい部屋
におしこめて、ごめんなさい」

「いそがしいあなたのことも考えないで、突然に訪ねて来
たりして……」

「商売柄、この家は夜が世界でしょう。目がまわるくらい
に忙しいの。また明日、ゆっくりお話ししましょうよ。用が
あったら、女中に言いつけてね。遠慮しないで、いてほし
いの」

そのひとは立ち上る時、良薫のあたまに手を置いた。

「おとなしいわね、良薫ちゃん」

「あのひと、誰」

と、良薫は襖がしまると、母親に訊いた。

「女学校のお友達よ」と、良薫の瞳をのぞきこむようにし
て言った。「私といちばん仲のよかったひと。何でも話合

っていた方よ。このお家にお嫁に来たの」

どこかの部屋で、三味線が鳴りだした。良薫が、聞き耳
をたてていると、

「このお家は、お料理屋さんだから、三味線がはいるの。
美しい芸妓さんが出入するお家よ」

「ぼく、芸妓さんで知ってるよ」

「そうね、うちにも芸者屋さんの檀家があるから……」

「お正月に、きれいなきものを着た芸妓さんが、本堂にま
いりに来るよ」

元旦には、仏応寺の本堂は、浅黄の幕を張りめぐらして、
住職の月堂宗珠が、参詣人の挨拶をうける習慣になってい
た。ひろい本堂の右手に、畳一枚ほどの机を持ち出し、朝
早くから宗珠が坐っていた。三十八歳の宗珠は、長身であ
り、髪をのばしていた。聡明なひろい額、うれいを含んだ
大きな眼をもっていた。年中白衣をきているのだが、身だ
しなみのよい宗珠の白衣は、その性格をあらわしているよ
うであり、墨染の法衣に、金襴の輪袈裟をかけている。舞
台の役者が僧服をまとったような印象を与えた。二十年來
僧服に慣れているのだが、いわゆる坊主らしい感じがすこ
しなかった。中年になってから僧侶になった人のように
法衣姿が新鮮に映るのである。

女中はおかみに言いつけられていたとみえて、早手まわ
しに床の用意にはいって来た。

「お風呂はいかがでございますか」

「ありがとうございます。すこし風邪かぜ気なものですから、ご遠慮させていただきます」

良薫は、眠くなっていた。

一つ床の中で、良薫は母のふところに手を入れた。弟も妹もない彼は、小学校に通うようになってからでも、母のふところから離れなかった。学校から走りながら戻って来ると、ランドセルをほうり出して、いきなり母のふところに顔をくっつけた。乳はとうに出なくなっている。乳首も小さくなっていた。乳が出なくともよかった。萎れたようになった母の乳房を弄もよほっていることが、たのしかった。

「何です、良薫、大きななりをして、恥しいと思わないのですか」

と、祖母のみね代が叱ることがあったが、乳首をくわえた良薫が、祖母を睨にらみつけた。檀徒が見かけて、呆もろれていた。母親は自分の乳首にしゃぶりつく良薫の学童帽を、笑いながら脱がすのである。良薫のあたまを、撫でた。八年間つづいた母と子の習慣を、思いついて中絶することは、母にもつらいことであるらしい。出なくなった乳房を吸われることは、肉体的な苦痛にもなるのだったが、蓮子は、こうしていることで母と子の実感をいつまでも維持していきたいようであった。

三昧が鳴り、大勢の唄声が枕にひびいた。良薫は乳首をはなしたが、片手では母の乳首を握っていた。半分、眠っていた。蓮子は、良薫の首を抱えていた。

その時の母の苦悩は、むろん良薫には判らなかつた。母は、まったく良薫が眠ってからも、ながい時間、目をさましていた。料亭が静まりかえり、川の流れが耳につく時間が来ても、母親は思いまどっていた。

その料亭に、何日滞在したか、良薫はよく覚えていなかった。二日や三日でなかったことは、たしかであるが、母の蓮子は、時々友達の家で泊ることで、仏応寺をたび出す練習をしていたのかも知れない。

料亭の川の流れの音を、良薫は思い出そうとしても器用に思い出すことが出来なかつた。流れが音をたてないということはない。川の音を思い出そうとすると、別の夜の、別の旅館で泊った時のことが思い出されるのである。

その時も良薫は、母につれられて、汽車にのつた。母はどこへ行くのだとも、説明をしなかつた。蓮子は、仏応寺にいらなくなっていたのである。何故、母が仏応寺にいらなくなっていたのか、良薫には判らなかつた。母は一度家を出た。その度に、良薫をつれ出した。良薫をすてて、母だけが家出することは出来なかつたものとみえる。その時、良薫の泊った旅館の前には、ものすごい流れの川があった。ひろい川であったが、流れは三分の一であり、あとは白い川原になっていた。川の向うには大きな山がひかえていた。右手に汽車の通りそうな鉄橋があり、しかも電車や自動車が走っていた。流れは豊富な水量を叩たたきこむような勢いで流れていた。落ちこんだならば、いのちはな